

船舶工兵の話 (後段)

荒木 肇

揚陸艦艇の先進国日本

Amphibious Assault Ship (強襲揚陸艦)の始まりは1956 (昭和31)年に米海軍が就役させた揚陸ヘリコプター空母 (CVHA) といわれます。1個大隊の海兵隊員とその装備を艦内に収容しました。それを搭載しているヘリコプターで揚陸地点の沖合から空輸揚陸させるものでした。続いて60年代にはイオージマ級、70年代にはタラワ級を開発します。垂直離着陸機も搭載して敵の抵抗を排除し、艦尾のウエルデッキからLCUなどの揚陸艇を進ませ戦車などの重装備も一気に上陸させるシステムも確立しました。

ところが、これに先立つ20年ほど前、1934 (昭和9)年には日本陸軍は特殊船「神州丸」を完成させています。2個大隊の歩兵と装備を船内に収容し、合計10機ほどの戦闘機と軽爆撃機をカタパルトから発射して橋頭堡の上空の制空権を確保

船尾のドアから大発、小発を進させるものでした。



写真1 大発 V字の船底がよく見える

こうした企画とその実現は、わが陸軍が世界最初に行いました。艦艇研究家の石橋孝夫氏によれば、英国海軍がこのような艦を計画したのは1940 (昭和15)年のことでした。

■神州丸

建造の目的は、おそらく海軍から働きかけられた対米戦 (フィリピン進攻) の一翼を担うものだったのでしょう。カタパルトを始めとして航空機装などは海軍の積極的な協力がありません。船内の区画配分は、中央の機関部を挟んで、前部は航空機の搭載スペース、後部は舟艇搭載用としてあります。91式戦闘機等を射出するカタパルトは船首両側にありま

した。

性能要目は、『播磨造船所五〇年史』、庭田尚三海軍造船中将著『建艦秘話』によれば、両者の記述には相違があります。石橋氏は総トン数8108ト、垂線長144尺、幅22尺、深さ13尺、機関タービン1軸1基、軸馬力7500馬力、速力20・4ノット (約38キロ/時)、兵装は8寸高射砲×2、乗員30名、舟艇要員160名、航空機要員30名、輸送兵員2000名、大発20隻、中発10隻、小発20隻としています。

■K装置

カタパルト発進というのは軍艦の艦載観測機や偵察機を射出するための方法です。いわゆる浮舟 (フロート) を付けた「下駄履き機」のための装備でした。その製造や技術指導は海軍が協力し、パイロットの訓練も海軍が担当しました。調べてみると、陸士36期卒の新藤常右衛門少佐 (敗戦時には大佐) が航空技術研究所のテスト・パイロット時代にこの訓練を受けていた記録があります。「K装置」と呼称して訓練は秘密裡に行っていたそうです。場所は静岡県三方ヶ原だったといえます。火薬の爆発で一気に空中に放り出される

ので肉体的にはキツイものだったそうです。

■神州丸の戦歴

神州丸の初陣は1937 (昭和12)年11月の杭州湾上陸作戦です。このときには現地ですうために内地で徴用した小型漁船100隻を搭載しました。また、翌年10月には広東攻略作戦に先立つバイアス湾上陸作戦にも参加したそうです。秘密保持のために写真もなかなかありません。名称もGL (神GOD、洲LAN D)、開発者の苗字からMT、あるいは龍城丸、扶桑丸などというように別名が多かったようです。



写真2 バイアス湾での神州丸

大東亜戦争の始まりでは1941 (昭和16)年12月のマレー作戦に参

加し、山下奉文第25軍司令官が乗船してきます。1942（昭和17）年2月28日ジャワ島西部バンタム湾での上陸作業開始直後のことでした。米豪両海軍の巡洋艦との砲雷撃戦がありました。このとき神洲丸（龍城と書かれている資料もあります）や輸送船数隻は魚雷を受けて大被害を受け、浅瀬に擱坐してしまいました。乗船中の今村均中將も海中を泳ぐことになりました。後に重巡「最上」の93式魚雷だったと判明し、海軍が陳謝しています。

神洲丸は、この後、浮揚作業を終えて修理され昭和19年に戦列に復帰しました。初期はルソン島からの帰途、20年1月3日に台湾の高雄西方で米軍機の攻撃を受け、積み荷の弾薬が爆発し、船体を放棄して漂流中に潜水艦の雷撃を受けて生涯を閉じました。

■三式潜航輸送艇「まるユ」

名称を表記するときに丸の中に輸送の「ユ」があるので、「まるユ」と呼ばれました。『陸戦兵器総覧』（1977年・日本兵器工業会編・図書出版社）の中に菅晴次中將の回顧があります。それを要約しますと、1943（昭和18）年春のことでした。



写真3 潜航輸送艇「まるユ」

参謀本部は「海洋決戦態勢確立要項」という一文を出します。今後はガダルカナル島のような、補給が途絶してしまうような戦況が随所に起こる可能性がある、それについては潜水艇による突破輸送しか方法がないという内容です。開発の担当は第7陸軍技術研究所になりました。海軍の潜水艦と異なって耐圧船殻を強化し、代わりに水防バルケット（沈没した場合に乗員の生命を維持する場所）を全廃しました。配管その他を簡単にするなどの特色があります。何よりの特徴はボイラー製造技術で建造できる程度の設計をし、リベットジョイントを極力少なくし耐圧殻も外殻も大部分を溶接したことでした。

潜水艦ならディーゼル・エンジンが常識ですが、第7技研で研究していたヘッセルマン機関を使います。このエンジンはスウェーデンで発明されたもので1930年代に進歩しました。空気を吸入して圧縮し、シリンダー内には燃料を直接噴射し火花で着火させます。ガソリンでもディーゼル・オイルでも使えました。

建造は1943（昭和18）年10月、東京の安藤鉄工所と日立製作所笠戸工場が始まります。そのわずか2ヵ月後には山口県柳井湾で運航に成功します。

いくつかの型がありますが、1型の全長は約41^尺、幅が同4^尺、排水量274^ト（浮上時）、水中は370^ト、物資積載量は米換算で24^ト、エンジンは水上で400馬力、水中では75馬力を出し、水上速度は時速7・5^{ノット}（約14^キ）、水中は同3・5^{ノット}（約6・5^キ）というものでした。

乗員は23名でほとんどが元戦車兵だったようです。機関や配管の取り扱いに慣れているし、上甲板には自衛用の37^ミ速射砲がありました。レイト島をめぐる戦いには3隻が輸送任務にあたりましたが、その消息は不明です。

■特大汽艇や空母

発動機艇（大発・小発）を使わずに兵員や戦車を揚陸させる工夫もありました。大型船だと空中攻撃を受けやすく、700^ト前後の海上トラックといわれた貨物船が注目されます。船首を観音開きにし、海岸に擱坐させ、歩み板を降ろして戦車と歩兵を同時に揚陸させます。

「蛟龍」（満載排水量850^ト、全長53^尺、戦車4輛、トラック1輛、兵員170名搭載）と名付けられた第1号船は1942（昭和17）年4月に竣工しました。続いて「蟠龍」（18年末に完成、満載排水量948^ト）、「海龍」が完成します。これが特大汽艇、またSS艇と呼ばれるようになりました。



写真4 特大汽艇SS艇
船首の開口部に注意

翌年12月以降、海上機動中隊が30個編成されてSS艇の運用にあたることとなります。2個が編成された海上機動旅団はこれを30隻保有する予定でした。上陸作戦では橋頭堡を確保するという運用が考えられていました。敗戦時には21隻がありました。



写真5 舟艇母船あきつ丸
船尾甲板上に3式指揮連絡機

■まとめ
日本陸軍は現代的な上陸用舟艇を、列国の中でも早く開発し実用化

します。また、揚陸艦艇の建造についても先進的で、優れていたことは確かです。国内戦は避ける、そうしたことから大陸に迅速に、効率的に兵力を送るということが陸軍の願いでありました。

「国防方針の第2次改定」が行われたのは1936（昭和11）年のことでした。ソ連が再び主要仮想敵国となり、翌年に「軍備充実計画」の大綱が策定されます。あわせて「兵器研究方針も改定」されました。その綱領も以前の「兵器の研究は戦略及び戦術上の要求を基礎」とすることから、今回のそれは「作戦上の要求を基礎とし：将来戦の推移を洞察して」に変わります。以後、ひたすらに對ソ連戦一辺倒の兵器体系を開発整備し、南方で米・英・蘭と戦うことになりました。

「兵器行政本部」が設置されたのは1942（昭和17）年10月15日のことでした。11月30日には「兵器研究方針」が前面改定されます。ただし、その優先順位は戦車、牽引車、その他機械化兵器であり、船舶防衛兵器は第7位であり、海運資材も8位です。そうしてガダルカナルの戦いなどで明らかになったのは、敵の

制空権下では大きな船では輸送は不可能ということでした。大発などの小舟による夜間の「蟻輸送」しか期待できないとなりました。

そのため、宇品の陸軍運輸部が海運資材として整備をしていきましたが、1944（昭和19）年夏頃には海運資材から兵器への移管を決定します。兵器行政本部の業務になりました。先進的だった上陸用舟艇は単なる輸送艇になってしまったのです。

☆参考文献の紹介：『陸軍船舶戦争』
平成8（1996）年5月、松原茂生著

船舶画 上田毅八郎、星雲社



松原氏は陸士50期、陸大59期、陸幕輸送課船舶班長。1917年生、大分県出身。遠藤氏は1927年生、海軍施設本部補給部、著書多数。上田氏は1920年生、船舶砲兵、乗船していた「金華山丸」被爆爆沈時に右手を負傷し左手のみで戦前船舶の絵を描いた。

安心・安全・真心

兵士の生命を護り
災害に備える

しんわ
信和株式会社

代表取締役 田中宏明（賛助会員）

TEL 03-6228-1326

FAX 03-6228-1329

防護用品

スリーピングバッグ、簡易ベッド
レスキューベスト、搬送マット